

## ヒューム哲学のカント的解釈を再検討する：因果論を中心に

萬屋博喜（広島工業大学）

よく知られているように、イマニュエル・カントは『プロレゴメナ』序文において、因果性の概念に関するデイヴィッド・ヒュームの批判によって「独断のまどろみ」から目覚めさせられ、自らの演繹論が因果性に関する「ヒュームの問題」に解答を与えたのだと述べている。しかし、カントが本当に「ヒュームの問題」に解答できているのかどうかは、研究者の間でも意見の一致を見ていない。近年では、カント研究者として著名なヘンリー・アリソンやポール・ガイヤーが重要な研究成果を公刊したことにより、「カントとヒュームをめぐる問題」が再び脚光を浴びつつある。

本提題の目的は、カント的に解釈されたヒュームの因果論を改めて検討することによって、因果性をめぐる「カントから見たヒューム」と「ヒュームから見たカント」の実像を明らかにすることにある。以上の試みは、因果性をめぐるヒュームとカントの思考が、特定の「主義」には収まらない厚みと広がりをもつという洞察を示すことにも繋がるだろう。